

(二) 双壁

帝国の双壁、オスカー・フォン・ロイエンタールとウォルフガング・ミッターマイヤーの間に、細やかな挿話とも言うべき会話がなされたのは、キルヒアイスがラインハルトに報告すべき、対貴族連合軍作戦計画の大綱をまとめ上げた三日目の深夜のことである。

時計の短針は右への傾斜を強めており、ローエングラム元帥府の建物を一歩出ると、冬の帝都の空気は鋭く頬を刺した。

が、ラインハルト軍の幹部は、その全員が極寒の惑星カプチュランカでの戦闘を経験している。彼らにとって真冬の帝都など、盛夏のカプチュランカほどの寒さを感じない……とはなかなか行かないようだった。

「冷えるな……」

コートの襟を立て、ロイエンタールが白い息を吐き出した。

「近くに良いスパがあるぞ。温まりにいかないか」

「——魅力的な提案だが、ありがたく受け入れるには難点が多すぎるのだな」

遠慮しておく……応じるミッターマイヤーに、ロイエンタールは皮肉っぽく唇の端を歪めた。貴公子と呼んでよい端正な表情が、そうすると妙に危険で小癖げなものに見える。

「奥方か……」

「ああ、今日は……いや、もう明日になっちゃったか。まあ、どんなに遅くなっても帰ると言っている。まさかに卿の紹介でスパで夜明かしした、とは言えまい」

「さてな。俺は家庭というやつを持ったことがないからな。午前様の卿を、卿の奥方がどのようにとつちめようと興味はない。どうせ、卿のことだ。仮眠したら、出仕するつもりだろう？」

「明日……ではない、今日か」

どうも疲れて鈍くなっているらしいな……呟きつつ、ミッターマイヤーは応じる。キルヒアイスはさらにその後、作戦案を読み直し、朝一番にはローエングラム侯に報告するつもりでいるのだろう。

「それを、俺だけがのうのと休みも取っていられまい。そうでなくとも、片づける仕事は山ほどあるし、ローエングラム侯から我々に下問があるかも知れん」

「キルヒアイスが報告するのだ。俺たちに出る幕はなからう」

ロイエンタールの表情がさらに小賢い翳りを増すのに、ふとミッターマイヤーが表情を改める。

「——ロイエンタール。そのスパ、だがな？」

「——ん？ 急に気でも変わったのか。まあ、卿が同行してくれぬと言うのなら、俺一人でも骨休めに行くさ。俺は今日は休ませて貰うつもりだ」

「盗聴などはされないだろうな」

「完全会員制だし、俺は出資者として個室を確保している。なんなら、帝都でも最高級の娼おんなを呼んでやってもいいぞ」

夜目には見えなかったが、ミッターマイヤーが頭頂まで茹で上がったことをロイエンタールは確信した。

「卿に少し訊きたいことができた」

「ここでは話せぬことか？」

「話せぬ」

深夜を通り過ぎて、いわゆる丑三つ時……などという言葉を彼らは知らなかった……の時間帯だったが、不夜城を誇る帝都の中心街。それも軍の中枢が集中する一角である。多くのビルは煌々と明かりを灯し、彼ら同様にコートの襟を立てて行き交う軍服姿も決して皆無ではなかった。

「いいのか、奥方には？」

「エヴァにはこれから連絡を入れる」

「俺と一緒に聞いたら、かえって心配されるのではないのか？」

ロイエンタールの言葉が終わらぬ内に、ミッターマイヤーはすケイタイでにPDAを取り出して話し始めている。ロイエンタールの揶揄は無視することに決めたようだった。

夫婦の会話に耳をそばだてる趣味はロイエンタールにもない。わざと一歩遅れ、冬空を見上げた。気温が下がっていくのが微かな、しかし高い響きとなって聞こえてくるようだった。

満天の星というのとは違う。

三〇〇億の臣民を統治する銀河帝国の首都オーデイン。その中心街を覆う人工の光の前に、満天の星々は、そのほとんどが光を霞ませていた。

ぱちりと音を立てて、ミッターマイヤーがPDAケイタイを閉じるまでに数分は要さなかった。

「——早いな」

「急ぐべき時と、急がざるべき時を弁える。それが戦場で後れを取らぬ所以だろう。少なくとも俺はそう思っている」

グレイの瞳がビルからの照明を弾いて微かに光って見えた。

「案内してくれ」

ロイエンタールがその場所を表現した言葉は必ずしも正しくはない。

確かに『スパ』と表現される温浴室を含んだ施設は備えられていたが、それは、その施設の一部に過ぎなかった。

ものに動ぜぬミッターマイヤーですら、一瞬自分はどこへ連れ

てこられたのか、と目を見開いて絶句したのは当然だった。予め教えられていなければ、新無憂宮の一面へでも拉ちし来られたのではないかと錯覚しても不思議ではないほどの豪奢さと、帝都の郊外近くのまるまる一つの街区を占めるほどの巨大さを併せ誇っていたのだから。

無論、ロイエンタールはここまで来るのにタクシーを拾ったのではない。彼がPDAケイタイで連絡してから、彼らの傍らに迎える車が停まるまで一〇分はかかっていたいなかった。

「完璧にクリンな個室、軽食を二人分、ワインは白の小瓶で良い。話が終わった後で、リラクゼーション・プランをAアイで二人分頼む」

出迎えたスタッフに向かって、ロイエンタールは使用人に対する口調で短く命じた。

承りました—— 恭しく一揖し、案内に立つスタッフの後ろ姿に、ミッターマイヤーは呆れかえった表情で囁く。

「おい、一体、なんだ、ここは？」

「スパ……と言うか、リラクゼーション・サロンと言うやつだ。

ちよつと値が張るんで、俺もたびたびは来ないが、プライベートルームではここ以上に密談に適した場所はない。まあ、俺も久しぶりの帝都だ。少々奢らせて貰っても良からう—— 気にするな、ここは俺の奢りにさせてもらう」

値が張ると言つて、一体幾らなのだ、ここの料金は……問おうとしてミッターマイヤーは止めた。『卿の俸給の一分……程度かな』などとうそぶかれたのでは、さしもの疾風ウォルフも心臓の健康を気遣わねばならぬ、というものではないか。

なるほど、これが王侯の生活というやつか……俺にはどうも身に馴染まぬが、ロイエンタールのやつには妙にしっくりと似合っている。

洗練を通り過ぎて簡素にすら見えかねぬほどに整えられた個室に案内され、軽食を供された時の、ミッターマイヤーの感想がそれだった。

が、王侯や大貴族の生活を実感して、感想を述べたりレポートを書いたりするのは、この場を訪れた目的ではない。

「早速だが、卿に訊きたいことがあるのだ」

「飲まないか、残念ながら四二六年ものではないが、四六七年ものの白だ。このビンテージもなかなか捨てがたいぞ」

「酒はいい」

ぴしりと決めつけてから、ミッターマイヤーは大きく息を吸い込んだ。

「今日の会議でだ。卿が何を問おうとしたのか、それを訊きたい」

「何を……だど？」

ワインを注ぐ手が止まった。

「どのことを言っている？」

「帝都で——」

言い差し、ミッターマイヤーは室内を見回す。

察して、ロイエンタールは頷いた。この部屋は、元帥府の作戦会議室並みに清掃が行き届いている。ここで盗聴されるなら、ロイエングラム元帥府の作戦計画から、卿の今日の愛妻弁当のメニューまですべて筒抜けだ。

「帝都で不測の事態が起きた際の、ロイエングラム侯の緊急
策<sup>コンティンゲンシー
プラン</sup>に対してだ」

「俺は異論を立てたつもりはないし、特に意地の悪い質問をした

つもりもないが——」

「いや、卿は何か言いたいことがあって、わざと言わなかった」これも手の込んだ軽食を口に運び、さすがに元帥府のランチとは較べものにならない味わいに思わず目を瞠る。

が、ミッターマイヤーにしてみれば食事の論評より遥かに優先すべきことがあった。

「——何年のつき合いになると思っている、ロイエンタール。俺にも言えぬことか？」

「いや……そうではない……そうではないのだが……」

「まさか、と思うが、ロイエングラム侯を支持したことを後悔しているのではあるまいな」

「俺をそんな男だと思うのか、ミッターマイヤー？」

「思わん。思わんから不審なのだ。卿ほどの男が迷うことだ。知らずに放置して後悔するくらいなら、今知って悩む方を俺は選びたい」

「なるほど、さすがは疾風ウォルフだな」

椰楡の響きはなかった。

事実、ロイエンタールは親友の正々堂々たる生き方に眩さを覚えることがしばしばある。常に正道を歩み、誰に向かっても、自らを信じたことを行っていると言い切れる生き方は、到底彼の採れるところではなかったからだ。

「そうだな……卿を悩ませるのは、俺の本意ではないが、卿が後悔するとなれば、なお一層、俺の本意に悖ることになる——上手く言えぬかも知れぬが、まあ、聞いてくれるとありがたい」

「——」

「つまりだ……」

目を閉じ、ロイエンタールは言葉を探す。この金銀妖瞳の名将^{ヘテロクロミア}

の語彙の豊かさは、凡百の男たちが足下にも寄れるものではないはずだった。

にも関わらず、思いを言葉に綴るまでに、ロイエンタールは二度、ワイングラスを口許に運ばなければならなかった。時を得るためと、アルコールの勢いを借りるため、である。

「——オーベルシュタインのやつは知っているのか、ということだ」

「な——？」

さすがに意表を衝かれたらしい。

ミッターマイヤーの表情が一瞬空白になり、それから、言葉の自身の余りの意外さへの驚きが、見開いた両目に満ちた。

「オーベルシュタインが何を？」

ミッターマイヤーにして余りに平凡な反問は、まさに驚きの裏返しだったに違いなかった。

「例の帝都防衛の対策だ」

「——」

「オーベルシュタインがあの策を知って、ローエングラム侯に同意したのかどうか……俺はそれを訊きたかったのだ。ローエングラム侯の裁可があることなど自明だったからな。侯が許可されないような作戦案を、キルヒアイスが持ち出すはずはないだろうが？」

「卿は……ロイエンタール、卿はなぜオーベルシュタインが、あの策に同意を与えてないんじゃないか、と思ったのだ？」

「ほう……？」

青い右目が鋭さを増す一方で、黒い左目がさらに深く猜疑の光を宿した。

「なぜ、オーベルシュタインが同意しないと思うのだ、卿は」

「俺は……」

一瞬考え込みかけ、ミッターマイヤーはロイエンタールが巧みに主客を逆転させたことに気づいた。

「訊いているのは俺だぞ」

「——例えばだ、ミッターマイヤー。俺と、卿の奥方と、いずれか一方しか生命を救えない、そういう状況になったとしてだな、卿はどうする？」

「エヴァを救ける」

間髪を入れずにミッターマイヤーは答え、ロイエンタールは強かに鼻白んだ表情になった。

「おい、ミッターマイヤー……」

「卿には自分で自分を救うだけの力もあり、器もある。エヴァは俺が守るべき家族だ」

「——いや、そうではなくだな……では、これでどうだ。オーベルシュタインと俺が前線に出ている。オーベルシュタインのやつを救援せねば、全線にわたって戦線が崩れるが、俺も卿の救援がなければ確実に全滅する。だが、俺が全滅し、戦死しても戦局には影響しない……いいか、ミッターマイヤー、ここで問題にしているのは、たとえばアムリッツアであり、今次の内戦そのものの帰趨だと思え。その上で、卿はオーベルシュタインか、俺か、いずれを救援する？」

「——オーベルシュタイン……だな」

一瞬の躊躇を先立たせてから、ミッターマイヤーの口調は渋々を絵に描いたようなものになった。が、息を継ぐ暇も惜しんで言葉が続ける。

「可能な限りの早さでやつを救いだし、直ちに卿を救いに赴く」

「ミッターマイヤー……」

「いや、正確にはあのオーベルシュタインがどうなろうとも、戦線を支えるだけの最小限度の手当ができれば、すぐだ」

「絶対に間に合わないとか分かっていてもか」

「そんなことはやってみなければ分かるまい」

戦場で『計算済みのリスク』、『切り捨て可能な犠牲』という言葉があるのは知っている。だが、最初から計算だけで戦勝のための犠牲と、そうでないものを切り分けるなどと言うことは俺にはできない——それが、ミッターマイヤーの返事だった。

「大体、勝利は手段だ。何かを得るためのな。味方とは、勝利を得るための道具ではなく、勝利によって得られるものを分かち合うための仲間だと、俺は思いたい。その上で、卿とあのオーベルシュタインのいずれに生き残っていて欲しいかと言えば、卿に決まっている」

これあるかな、疾風ウォルフ——この友人にこう問えば、こう答えるだろうことは予想するまでもなかった。ゆえにこそ、できればミッターマイヤーとは敢えてこの話題を語りたくなかった。いや、そうとも言えるが、そうでないとも言えなくもない。

ローエングラム侯……ラインハルト・フォン・ミュゼルと名乗っていた、蒼氷色の瞳の若者を頼ったこと。彼の帷幕に参加したことを、ロイエンタールは一瞬たりとも後悔したことはない。ラインハルトが現れなければ、自分は遂には帝国の一介の武将として終わったのではないかと思う。胸の裡に、言い難い鬱懐と世の中への軽侮と瞋恚を抱え込んだまま、墓碑銘を刻んだのではないか。

『オスカー・フォン・ロイエンタール、戦線にあつては不敗の驍将として、遂に帝国の誇りを全うす』——とでも。

ラインハルトとの邂逅が、彼の鬱屈に初めて往くべき道を与えた。今の帝国に飽きたらぬ、愚劣な門閥貴族の牛耳る社会で、いかほどの地歩を確保したところで、所詮は叛徒……同盟どもとの戦いで便利に使われて終わるのではないか……そう思うのであれ

ば、今の帝国を倒してしまえばよい。

単純といえば余りに単純。しかし、自分よりも一〇歳以上も年下の少年の真っ直ぐな志は、ロイエンタールに痛恨とも言うべき衝撃を与えた。

「——一体、俺はこの歳まで何をしてきたのだ。侯の一〇年は、俺の一〇年でもあったはず。俺には、さらにもう一〇年の歳月があったのではないか。その二〇年を……」

「おい、ロイエンタール！」

ミッターマイヤーの声に、ロイエンタールは、無意識の裡に想いを言葉に変えていたことに気づいた。

「何が言いたいのだ、ロイエンタール。さっぱり分からんぞ」

「俺はな、ミッターマイヤー。俺はあくまでローエングラム侯の忠実な臣下でありたい」

「当たり前だ、何を言っている!？」

「そのためにローエングラム侯には完璧でいて頂きたいのだ——多分な」

「……」

やっぱりさっぱり分からぬ、という顔つきで、ミッターマイヤーはしばらく親友の顔をにらみ据えていた。軽食の皿を空にして押しやると、軍服の裾を払って立ち上がりかける。

「どこへ行く？」

「せっかくだからな、卿のお奨めのリラクゼーション・プランとやらを体験させて貰う。どうやら、卿はそれ以上、話すつもりがないようだからな」

「いや、俺は……」

「まあ、いいさ」

「どうやってスタッフを呼ぶのだ？」とミッターマイヤーはテーブルの上を眺め、銀製の重そうな呼び鈴に気づいた。

「さつき、卿は俺に訊いたな。どうして、俺があのおーベルシュタインが、侯の策に同意しなかったのではないかと思ったのか、と」

ミッターマイヤーは呼び鈴を振る。

音がしなかった。

怪訝そうな表情になったミッターマイヤーがもう一度振ろうとするのを、ロイエンタールは制止する。振ると、スタッフの許にその旨が通知される。一度で十分。何度も振るのは田舎者として嘲笑^{わら}われかねない。

肩を竦めて、ミッターマイヤーは呼び鈴をテーブルに戻した。

「——できるだけ多くの兵を決勝点に投入するのが戦勝の要諦だとすれば、侯の策はあたら味方の一部を遊兵とする結果を招く。戦理だけを論じれば、そうなる。つまりそういうことだ」

「オーベルシュタインなら戦理だけを論じるだろう、というのだな」

「少なくとも、やつはそういうやつだ。俺は、そう思っている」

ドアがノックされる音が、会話を途切れさせた。

スタッフが、リラクゼーション・プランの用意ができた旨を伝える。約一時間半のコースの後、元帥府への出仕までの仮眠を取れる寝室が用意される。

「当サロンのリラクゼーション・プランのあとであれば、僅かな仮眠であつても二時間のタンクベッド睡眠にも匹敵するリフレッッシュ効果を得ることが可能でございます」
とはスタッフの説明だった。

彼らに伴われてミッターマイヤーが去ってから、ロイエンター

ルは少し一人にさせてくれと断り、室内に残った。いずれ、この日は休む予定だったから、少しくらい遅くなっても問題はない。

「戦理は——か」

貴族どもは互いに反目している。ラインハルト軍の主力を自らの主力で拘束し、高速の別働隊を以て一気に帝都を衝く。それがベストの作戦と分かっている。おいそれとは実行できない。森を見ただけで貂の毛皮の値段を計算する、というやつだ。万一、抜け駆けを図る者が出て、その前に貴族どもの主力が減んでいる。帝都をほぼがら空にする基本作戦は、その考え方がベースだ。

一刻でも早く、貴族軍の主力を粉碎するには、可能な限りの兵を前線に集中する必要がある。オーベルシュタインは戦理に拠って主張するだろう。では、そもそもローエングラム侯ラインハルトが、帝都の守りに意を払うのは何故か。

ロイエンタールは微かな軋みを胸の裡に聞いた。

帝都には、ラインハルトの姉、グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼがいる。

ミッターマイヤーは、夫人のエヴァンゼリンが彼の守るべき家族だと言った。ゆえに、親友^{ロイエンタール}の危急を見捨てても、彼女を守ると——それは良い。それがミッターマイヤーだ。

だが——

「グリューネワルト伯爵夫人と……おそらくは、キルヒアイス……彼らを除けば、ローエングラム侯にとって他者とはすべて代替のつく存在なのではないのか。ゆえに、代わりがない唯一の者を守るために、敢えて作戦の基本を枉げたのではないのか」

そして、オーベルシュタインは——それが戦理に反するゆえではなく、ローエングラム侯ラインハルトの、支配者としての完璧を求めるが故に、彼にとって『代替の利かぬ者』一切の排除を

こそ望むのではないか。

夫人を氣遣うミッターマイヤーに、その人としての弱みを親友の美点として許せる自分が、なにゆえにローエングラム侯ラインハルトにだけは同じ視点を持ち得ぬのか……一体、自分は彼の若者に何を求めているのだろうか。

理解は苦さを伴った。

オーベルシュタインの考え方に……というよりも、自身こそが、ローエングラム侯に『常にロイエンタール自身を凌駕する完璧さ』を求めるがゆえに、あの義眼の男の考えを理解し得るのではないか。その思いは芳潤な白ワインの味わいを苦渋に満ちたものに変えた。『自分を超えて完璧である』ことを求める相手が、実は『他に代え難い、失うべからざる者』という弱さを持つ。その弱さを許すことができないのではないのか——と。

混乱した想いのままに……自分が混乱している、と指摘されれば、ロイエンタールは眉を顰めて否定しただろうが……ワインの最後の一口を咽喉に流し込んだ彼は、重い呼び鈴を持ち上げた。